スゥマローコフ『第一書簡詩 ── ロシア語について』翻訳と注釈

«Первая эпистола о русском языке» А. Сумарокова Перевод и Комментарии

鈴 木 淳 一

Д. СУДЗУКИ

前回は、スゥマローコフが1747年に執筆し、1748年にペテルブルク科学アカデミーから小冊子ながら単行本として刊行された『二つの書簡詩 Две эпистолы Александра Сумарокова. В первой предлагается о русском языке, а во второй о стихотворстве』の後半部『第二書簡詩 ── 詩作について』のみを取り上げ、その散文訳と注釈を試みた（「文化と言語」第53号、2000年10月、103～169頁）。今回はその前半部『第一書簡詩 ── ロシア語について』について、前回同様に散文訳と注釈を試みてみたい。用いたテクストももちろん前回同様、1957年に出版された『詩人文庫・大シリーズ・第二版・スゥマローコフ選集 А. П. Сумароков. Избранные произведения. Библиотека поэта. Большая серия. Второе издание. Советский писатель. Ленинград. 1957.』所収のものである。

前回も述べたように『第二書簡詩 ── 詩作について』は、スゥマローコフがフランス古典主義詩人にして理論家ボアローの『詩法』に範を取ってロシア文学の進むべき道筋を示した、いわば「ロシア古典主義のマニフェスト」とでも呼ぶべき作品であった[1]。しかしながら両者の立場には決定的な差異があった。

[1] 『第二書簡詩 ── 詩作について』が同時代人にどのように受け入れられたのかについては、次のような意見もある ── 「ボアローの言い回しはフランスのみならず、ロシアで

17世紀フランスの古典主義全盛時代を生きたボアローにはとうの昔に解決済みであった「新しい標準語の確立」という課題が、スゥマローコフが作家活動を開始する1730年代後半のロシアでは可及的速やかに解決すべき大問題として立ち塞がっていたからである。ボアローにとって16世紀中葉にプレイアード派詩人デュ・ベレーとロンサールによって確立され、その後ほぼ1世紀にわたって洗練され続けていった標準フランス語、ならびにそれによって書かれた文学作品が所与のものであり、彼の『詩法』はいわば文化の精華としての文学を理論的に語ってみせたものだとすれば、国力に見合った自立的な国文学を模索し始めた1730年代のロシア作家たちにとっては、文学作品のあるべき姿を提示すると同時に（あるいはその前に）、どうしてもそうした文学作品にふさわしい新しい標準ロシア語を ── すなわちそれまで文語として使われていた教会スラヴ語とは違った、世俗化して誰にでも分かるようなものでありながらも文化水準の高いロシア文語を ── 確立する必要があったのである。

かくして1730年ペテルブルク科学アカデミーからフランス作家ポール・タルマンの『愛の島への旅 Езда в остров любви』の韻文訳を出版したトレヂアコフスキーはその序文で、文学作品は国民の多くが理解できない教会スラヴ語ではなく、日常巷間で話される平易な言葉で書かれなければならないと宣言する。そしてその宣言を『ロシア語の純粋性について Речь о чистоте российского языка』（1735）や『新旧正書法、およびそれにまつわる事項全般に関する外国人とロシア人の会話 Разговор между чужестранным человеком и российским об орфографии старинной и новой и о всём, что принадлежит к сей материи』（1748）において新しい標準ロシア語に関する考察として深める

も格言にまでなった。この意味でボアローに対抗できたロシア最初の詩人はといえば、クルィローフとグリボエードフである。もしスゥマローコフの『第二書簡詩』が何かで18世紀ロシアの読者の気を引いたとすれば、それは理論的独創性でも華麗な文体でもなく、その風刺的な情熱によってであり、それ以外の要素はすべていわばニュートラルなものとして受け取られたのである」── *Й. Клейн.* Русский Буало? (Эпистола Сумарокова «О стихотворстве» в восприятии современников). // Сб. «18 век», вып. 18. СПб., 1993, с. 52—53.

一方、宣言に沿った形で実作も重ねながら、1735年には『新簡約ロシア詩作法 Новый и краткий способ к сложению российских стихов с определениями до сего надлежащих знаний』によって従来の音節詩を一掃し、近代ロシア語詩法の土台となるべき音節力点詩を提唱するのである。またトレヂアコフスキーの提唱した詩論を批判的に継承したロモノーソフは、その詩論を1739年『ロシア詩作法に関する書簡 Письмо о правилах российского стихотворства』において補完的に完成させ、実作によって自らの理論の正当性を証明する一方、『簡略雄弁術入門その一・修辞学 Краткое руководство к красноречию. Кн. 1. Риторика』（1748）、『ロシア語文法 Российская грамматика』（1757）、『ロシア語における教会用書籍の効用に関する序文 Предисловие о пользе книг церковных в российском языке』（1758）において標準ロシア語の確立に精力的に取り組んでいったのである。

そうした時代の流れに即して見れば、スゥマローコフの『二つの書簡詩』に「ロシア詩作論」と「ロシア語論」が並置されてしまうのはむしろ必然の成り行きであった。ここでふと、国を背負って立つ社会的エリートとして新しい国文学の担い手たらんとする強烈な目的意識と自負に溢れる貴族出身のスゥマローコフ、氏素性を問わない能力主義の社会の中で立身出世の欲望と国士としての自覚に支えられながら、我こそは新しい国語と文学の創始者たらんとする気概に燃える司祭の子トレヂアコフスキーと農民の子ロモノーソフ ── これら三者の自尊と憎悪と羨望の絡まり合った熾烈な先陣争いに思いを馳せてみるのも一興ではなかろうか？[2]

スゥマローコフの『第二書簡詩 ── 詩作について』がボアローの『詩法』を下敷きにしているとすれば、『第一書簡詩 ── ロシア語について』の、少なくともその問題意識と意欲の面で、模範となっているのはデュ・ベレーの『フラ

[2] 彼ら3人はロシア語、ロシア語詩作法に関するお互いの主義主張をめぐって争うライバルであり、1743年には実際に旧約聖書の「詩篇第143歌」を題材とした詩的翻案の競技会をおこなっている。

ンス語の擁護と顕揚 Défense et Illustration de la langue française』(1549)、ことにその第1部であろう。それまでラテン語に対して俗語とされていた国語＝フランス語の美しさと優秀性を訴え、その豊かな可能性を信じて疑わない愛国的な思想に貫かれたベレーのこの作品は、まさしくトレヂアコフスキーが、ロモノーソフが、そしてスゥマローコフが直面し、格闘していた問題にぴたりと符合するものだったからである[3]。

では『フランス語の擁護と顕揚』とはどのような作品なのか？『第一書簡詩』と比較する場合の参考に、『フランス語の擁護と顕揚』日本語訳の「訳者序文」からの引用によってその概要を紹介しておこう。なお訳文が古いため、漢字や仮名遣いは現代風に改めてある。

「『フランス語の擁護と顕揚』は二つの書より構成されている。第一の書においては著者は、あらゆる種類の文学作品を成すに自国の国語なるフランス語を用いるべきことを多くの理由を挙げて説明している。その理由というのは、まず第一に、フランス語が決して野蛮(バルバール)とみなされるべきでないこと、第二に、微細な点では未だギリシャ語、ラテン語に劣る所なしとしないが、これもローマ人が如何にラテン語を発達せしめ、ギリシャ語に比肩せしめた得たかを思えば、フランス語といえども今後、ギリシャ語、ラテン語の完璧に達することを充分予想し得ること、第三に、これはもっとも重要な点なのだが、一般フランス人が余りにもギリシャ語、ラテン語を重んじる結果、当然フランス語の研究

[3] 『フランス語の擁護と顕揚』は、しかし、別に理論的にも内容的にも画期的で独創的な作品だったわけではない――「まずフランス語で書くということ。この考え方はそんなに新しいものではない。トリー、ドレ、ジャック・ド・ボーヌ、ルブロンがデュ・ベレーにはるか先んじている。形態も新しくはない。多くのくだりはスペローネ・スペローニの『諸国語に関する対話』(1542) の逐語訳なのだから。つぎにフランス語を顕揚すること、わが国における古典主義の基礎を置く模倣というさらに豊かな主張は、クィンティリアヌスから着想を得たものだった。〈略〉とはいえ『擁護』は、それまでただ口にされていただけだったことを叫び、熱狂へと誘ったのである。本当をいえば、この作品が新しいのはなんら原理によるわけではなく、かずかずの傑作の開花のおかげであり、『擁護』自身、ただその文体によって最初の傑作だったにすぎない」(ヴェルダン＝ルイ・ソーニエ『16世紀フランス文学』、文庫クセジュ、白水社、1990年、102〜103頁)。

に充てるべき年月を、古典語の探索に費やして、フランス語の発展を阻止するのみならず、もっとも重要たるべき技芸学術の研究に立ち後れること著しきを説いている。要は言葉にあらずして、それが論じるべき内容である。それがためには学ぶに労多き古典語を採らずして、学び得て効果多きフランス語を選ぶべきである。当時の古典語崇拝の行き過ぎたる通弊を一掃して健全豊穣なるフランス語の発展に邁進すべしというにある。

第二の書においては、著者が第一の書において十分擁護し得たと信じるフランス語を、それでは如何にして顕揚すべきかを示している。すなわち如何にしてこの国語を豊富ならしめ、向上せしめ、美化すべきかを説明する。そのもっとも適切な、もっとも顕著な実験台として詩および詩形の問題が取り上げられている。計らずもこの第二の書において、デュ・ベレー自身の念願たるフランス語の顕揚と、彼の属するプレイアード詩派の詩人たちの計画たる詩論の一体系とが、渾然融和して見事な効果をあげているのである。まず最初、デュ・ベレーは、16 世紀初頭のフランス詩一般について説き、その結論としては、彼自身がフランス語の熱心な擁護者たるにかかわらず、当時第一流と言われた人々の詩をさほど高く評価し得ないといい、そのフランス詩一般の不振の原因としては、〈詩人は生まれながらにして成る〉というラテンの格言に頼り過ぎることを説いて、これを排斥している。要は遥かに具体的な詩形の問題にありしとし、プレイアード派に当時対抗していたマロー派の用いた、レー（lai）、ヴィルレー（virlai）、ロンド（rondeau）、トリオレ（triolet）、バラード（ballade）、マドリガル（madrigal）等、いわゆるフランス中世に固有の詩形を捨て去って、さらに、あるいは古くギリシャ、ラテンの詩人から、あるいは新たにイタリアの詩人から種々なる詩形を採るべきを主張し、これらに関するいちいちの注意を与えている。エピグラム（épigramme）、エレジー（élégie）、オード（ode）、ソネ（sonnet）が、その主なるものである。転じて詩の用語として新たに言葉を創り出すべきか否かの是非を論じ、次いで脚韻の用法、さらに韻律の問題とともに、古くから行われている文字の遊戯に言及し、再転して特殊な詩的語法の問題等、いわゆる厳密な意味での詩学を、少々

雑然たる秩序の中に展開して興味をそそる。以上で詩の技巧方面を終わって、再度当時の一般フランス詩人の批評に戻り、その特徴たるいわゆる俗衆の解し得ざる難解晦渋の詩をもって学識を衒わんとする通弊を捉えて巧みに批判し、幾多の実例をもって読者を納得せしめるに足るものがある。最後にデュ・ベレーは、フランス人が自国の国語に対して十分の矜持を持すべきを力説し、国語をもって文を草するに羞恥の念を抱くべからざるを繰り返し切望している」(加藤美雄訳『フランス語の擁護と顕揚』、仏蘭西文芸叢書 11、白水社、1943年、13〜15 頁)。

最後に、屋上屋の感がなきにしもあらずだが、念のために『フランス語の擁護と顕揚』の構成を、これもまた翻訳にしたがって紹介しておこう。

＊フランス語擁護のために（ジャン・ドレの詩作品）

＊わがいと尊き枢機官閣下に捧ぐ（父方の年上の従兄弟への献辞）

＊第一の書

第一章　諸国語の起源

第二章　フランス語が野蛮（バルバール）と呼ばれるべきでないこと

第三章　フランス語がギリシャ語、ラテン語に比して豊富ならざる理由

第四章　フランス語の多くの人の評するほど貧弱ではないこと

第五章　翻訳はフランス語完成のために不充分なること

第六章　悪しき翻訳者について、また詩作はこれを翻訳せざること

第七章　ローマ人は如何にして国語を豊富ならしめたか

第八章　古代ギリシャ、ローマの作家を模倣してフランス語を補充すべきこと

第九章　二〜三の異議にこたえて

第十章　フランス語は哲学するに無能ならざること、また何故古代人が現代人より学識に富んでいたか

第十一章　古代語においては古代人に比肩し得ざること

第十二章　著者の弁護

＊第二の書

第一章　著者の意図

第二章　フランスの詩人たち

第三章　才能のみにては、詩において不朽の名作を成さんとする者には、十分ならざること

第四章　フランスの詩人は如何なる種類の詩を選ぶべきか

第五章　フランスの長詩（叙事詩）について

第六章　新語の発見、およびフランス詩人の遵守すべき若干の事項について

第七章　脚韻、および無韻の詩句について

第八章　韻律（rythme）という言葉について、有韻の詩句の発見について、およびわが国語において慣用化されたその他二、三の古代語について

第九章　若干のフランス語の語法の観察

第十章　詩の良き朗読法について

第十一章　技巧以外の二、三の観点について、およびフランス語の拙劣な詩人たちに対する嘲罵のこと

第十二章　フランス人は自国語をもってフランスへの賞賛を交えて書くべきことを勧告す

＊文学の仇敵たる大望悋慾の士に捧ぐ（デュ・ベレー自身の詩作品）

＊読者に捧ぐ

なお『第一書簡詩』もまた隣接韻のアレクサンドラン（6脚弱強格）で書かれた全142行のひと繋がりの作品であるが、ここでも前回同様、内容のまとまりに配慮しながら適当な長さに切ったうえで、始めに散文訳、次に（前回に比べてはるかに少ないけれど）注釈という順番で作業を進めて行きたいと思う。デュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』に言及するときは、たんに『擁護』と記すこととする。

ЭПИСТОЛА I

第一書簡詩

001 Для общих благ мы то перед скотом имеем,
002 Что лучше, как они, друг друга разумеем
003 И помощию слов пространна языка
004 Всё можем изъяснить, как мысль ни глубока.
005 Описываем всё, и чувствие и страсти,
006 И мысли голосом делим на мелки части.
007 Прияв драгой сей дар от щедрого творца,
008 Изображением вселяемся в сердца.
009 То, что постигнем мы, друг другу сообщаем
010 И в письмах то своих потомкам оставляем.

〈散文訳〉

幸いなことに我々（人間）は誰しも家畜に比して優れており、家畜よりもずっとよくお互いを理解し合うことができるし、また十分に発達した言語をあれこれ駆使することによって、あらゆる事物を、それがどんなに深遠な思想であろうとも、説明することができる。我々はあらゆる事物を、あらゆる感情、あらゆる情念を叙述しもすれば、考えていることを音声によって事細かに分節化して言い表しもする。恵み深き創造主からこうした言語運用という貴重この上ない能力を与えられていればこそ、我々は心中に生起することをも描出してみせることができるのである。そして我々は達成可能な事柄をお互いに伝達し合うとともに、それを文字にして子孫代々に遺産として残してゆくのである。

〈注 01〉

特に注釈の必要もあるまい。デュ・ベレーが「第一の書」１章を「諸国語の起源」と題して、「されば各国の国語は草や根や樹木の如く自然に生まれたのではなく、すなわちその種類によりあるいは羸弱（るいじゃく）、柔弱であり、あるいは健全、強壮であるのではなく、はるかに人間の持つ思想概念の重荷を担い得るも

のである。しかし国語の素質はまったく人間の意欲および意志により世に生じたのである。これこそ我々がかくもある一ヶ国語を賞賛し、他の一を誹謗し得ぬ所以であろう…」（加藤美雄訳『擁護』31～32 頁）と書いているのに対し、もっと大雑把な序論として、人間が地上の支配者であるのは言語を有しているからだということを言っているに過ぎない。

011 Но не такие так полезны языки,
012 Каким говорят мордва и вотяки;
013 Возьмем себе в пример словесных человеков:
014 Такой нам надобен язык, как был у греков,
015 Какой у римлян был и, следуя в том им,
016 Как ныне говорит Италия и Рим,
017 Каков в прошедший век прекрасен стал французский,
018 Иль, наконец, сказать, каков способен русский!

〈散文訳〉

だがモルドバ人やウドムルト人が話しているような言語はさして有益なものではない。手本とすべきはもっと教養豊かな民族の言語であって、我々に必要なのは古代ギリシャ人が使用していたような言語であり、古代ローマ人に使用され、その後継承されて今日イタリアとローマで話されているような言語であり、前世紀（17 世紀）に美を極めるにいたったフランス語のような言語であり、とどのつまりロシア語が最終的に到達しうるであろうような言語なのである！

〈注 02〉

モルドバ（＝モルダビア）とウドムルトが文化の遅れた国民として選ばれているが、特別な理由があってのことなのかどうかは不明。

〈注 03〉

ここには『擁護』「第一の書」3 章の次のような一節が呼応していよう ── 「ゆえに国語の育成においては我々よりはるかに熱心な彼らギリシャ人、ロー

マ人にして、なおその莫大なる辛苦、巧智なしには、それらの国語のうちに如何なる優雅調音の妙なく、引いては雄弁の術さえ獲得し得なかったとするならば、我々の通俗語たるフランス語が、将来十分期待し得るだけの豊富さを未だ持たず、またそれがためにこの国語が卑しきもの、価少なきものとして蔑視せられることありとしても驚くに足りないのである。やがて時到れば、(恐らく)フランスの担う好運の波に乗って、この高潔、富強の王国がようやく世に君臨するに到るだろう。かつまたわが国語も(フランソワ I 世とともにまったく埋れ隠されなかったとすれば)まだ地中に根を張り始めたばかりとはいえ、土を破って芽をふき、やがて高く大きく成長して、ついにはギリシャ、ローマの人々にも比肩し得るようになり、〈略〉今度は、彼らギリシャ人、ローマ人におけるごとくホメロス、デモステネス、ウェルギリウス、キケロを産むに到るであろう」(加藤美雄訳『擁護』、41〜42 頁)。最後の一文は後発のスゥマローコフの立場で言い換えるなら、「わがロシア語もまだ地中に根を張り始めたばかりとはいえ、土を破って目をふき、やがて高く大きく成長して、ついにはギリシャ、ローマ、フランスの人々にも比肩し得るようになり、今度は彼らギリシャ人、ローマ人、フランス人におけるがごとくホメロス、デモステネス、ウェルギリウス、キケロ、コルネイユ、ラシーヌ、モリエールを産むに到るであろう」とでもなろうか。ちなみにカラムジンは『ロシア作家の殿堂 Пантеон российских авторов』(1801)で、スゥマローコフはかつて「北方のラシーヌ северный Расин」とも「我が国のボアロー наш Буало」とも呼ばれていたと記している。

019 Довольно наш язык в себе имеет слов,
020 Но нет довольного числа на нем писцов.
021 Один, последуя несвойственному складу,
022 Влечет в Германию Российскую Палладу
023 И, мня, что тем он ей приятства придает,
024 Природу красоту с лица ея берет.

025 Другой, не выучась так грамоте, как должно,
026 По-русски, думает, всего сказать не можно,
027 И, взяв пригоршни слов чужих, сплетает речь
028 Языком собственным, достойну только сжечь.
029 Иль слово в слово он в слог русский переводит,
030 Которо на себя в обнове не походит.

〈散文訳〉

我がロシア語は十分な語彙を持っている。それにもかかわらず、ロシア語を自在に駆使できる作家の数は十分というには程遠い。ある作家はロシア語とは無縁の語法や文体に則って、ロシアのパラスをドイツ化しようとしている。この作家はそうすることでロシアのパラスに魅力を与えているつもりだろうが、その実それはロシアのパラス本来の美しさを奪い取る行為に他ならないのである。またある作家はロシア語の読み書きをきちんと習得してもいないのに、ロシア語ですべてを言い表すのは不可能と考え、他国の言葉をあれこれと取り交ぜてロシア語の文章を編み上げているが、その文章たるや焼き捨てるしかないようなひどい代物である。この作家はまた外国語の作品をロシア語に逐語訳しているけれど、ロシア語という新調の服を来たその作品は原作に似ても似つかないものとなっている。

〈注 04〉

「パラス Паллада」はアテネの守護女神であるとともに、知性、工芸、武術の守護女神であるアテーナーの呼び名の一つ。したがって「ロシアのパラス」とは広義にはロシアの学術全体を、狭義にはロシアの文芸作品を意味しており、「ロシアのパラスをドイツ化する」とはロシアにドイツの知識や技術を導入するのみならず、その導入の手段となるべきロシア語自体をドイツ語に近づけようと風潮を指していると思われる。ベルコフの注によれば、ここにロモノーソフ批判を読み取る学者もいるけれど、この時期（1747〜1748 年）スゥマローコフとロモノーソフの関係は友好状態にあり、『第二書簡詩』ではロモノーソフがマレルブやピンダロスに比肩しうる詩人とされているのだから、批

判されているのはロモノーソフではなく、当時のアカデミーの翻訳者たちと考えるのが妥当であるとしている。

余談ながら、「パラス Паллада」のロシア語読みは「パルラーダ」あるいは「パラーダ」であるが、「パルラーダ」と聞けば、1853年日本を訪れたプチャーチンのことを思いおこす向きも多かろう。あるいは同じフリゲート艦「パルラーダ」にプチャーチン提督の秘書として同乗し、後にその航海の記録を『戦艦パルラーダ Фрегат «Паллада»』(1858) として発表した文豪ゴンチャローフを思い浮かべる人もいるかも知れない。また『戦艦パルラーダ』の日本関係部分は、『日本渡航記』(井上満訳、岩波文庫、1941) あるいは『ゴンチャローフ日本渡航記』(高野・島田訳、雄松堂書店、1969) として翻訳されているので、それをお読みになった方もいらっしゃるかも知れない。

ちなみに1747年にスゥマローコフが『二つの書簡詩』出版依頼のためにペテルブルク・アカデミーに原稿を提出したとき、ロモノーソフとトレヂアコフスキーがアカデミーに求められて書評を書いているが、両者ともこの作品をボアロー的な教訓的作品としてよりもむしろ風刺作品として理解しながらも、前者はおおよそ肯定的な、後者は強く否定的な態度を取っている：*Й. Клейн.* Русский Буало? (Эпистола Сумарокова «О стихотворстве» в восприятии современников). // Сб. «18 век», вып. 18. СПб., 1993, с. 48—49。生涯を通して見ればスゥマローコフは、トレヂアコフスキーとは終始一貫して、ロモノーソフとも一時期を除いてだいたいが論争状態にあった。

031 Тот прозой скаредной стремится к небесам
032 И хитрости своей не понимает сам.
033 Тот прозой и стихом ползет, и письма оны,
034 Ругаючи себя, дает писцам в законы.
035 Хоть знает, что ему во мзду смеется всяк,
036 Однако он своих не хочет видеть врак.
037 «Пускай, — он думает, — меня никто не хвалит.

038 То сердца моего нимало не печалит:
039 Я сам себя хвалю, на что мне похвала?
040 И знаю то, что я искусен до зела».
041 Зело, зело, зело, дружок мой, ты искусен,
042 Я спорить не хочу, да только склад твой гнусен.
043 Когда не веришь мне, спроси хотя у всех:
044 Всяк скажет, что тебе пером владети грех.

〈散文訳〉

またある作家は貧弱な散文を書き散らすことで天上に駆け上ろうとしているが、この作家は自分で自分の芸のほどをわきまえていないのである。またある作家は散文にしろ韻文にしろ碌でもない作品ばかりを書き殴り、自らの体面を損なうばかりだというのに、そんな作品を他の作家たちに規範として押し付けようとしている。そしてそうした行為に誰もが嘲笑をもって応えていることを知っていながら、それでもなおかつ自分の作品をくだらないものとは思いたくないのである。この作家はこう考えているのだ ──「誰一人褒め称えてくれなくて結構。だからといって私の心は少しも痛まない。自分で自分を褒め称えよう。他人の賞賛など何になろう。自分が紛うかたなき名文家であることは私自身が知っているのだから」と。我が友よ、君が紛うかたなき名文家中の名文家であるかどうかを議論する気はないが、君の語法文体が嘔吐を催させるほどひどいものであることだけは言っておこう。私の言うことが信じられないなら、誰でもいいから尋ねてみるがよい。誰もが異口同音に、君が物を書くのは罪なことだと答えるであろう。

〈注 05〉

「天上に駆け上ろうとする」とは「文壇の頂点に君臨しようとする」ということであろう。

045 Но только ли того? Не можно и помыслить,
046 Чтоб враки мне писцов подробно все исчислить.

047 Кто пишет, должен мысль прочистить наперед
048 И прежде самому себе подать в том свет;
049 Но многие писцы о том не рассуждают,
050 Довольны только тем, что речи составляют.
051 Несмысленны чтецы, хотя их не поймут,
052 Дивятся им и мнят, что будто тайна тут,
053 И, разум свой покрыв, читая темнотою,
054 Невнятный склад писца приемлют красотою.
055 Нет тайны никакой безумственно писать,
056 Искусство — чтоб свой слог псправно предлагать,
057 Чтоб мнение творца воображалось ясно
058 И речи бы текли свободно и согласно.

〈散文訳〉

だがはたしてこれで全部だろうか？　とてもじゃないが、ヘボ作家どもの駄作を一から十まで数え上げるなんて、考えてみるだけでぞっとする。物を書く人は、筆を取る前に予め考えをはっきりさせ、何はさておき自分でその考えをすっかり理解しておかなければならない。それなのに大半の作家はそのことをさっぱり顧慮せずに、ただ文章を作り上げるだけで満足し、ことたれりとしている。教養のない読者はそうした作家の作品を理解できずにただただ目を丸め、そこには何か秘密があるに違いないと思い込み、自分の理性に蓋をしたままで闇雲に読み進み、その作家の訳の分からぬ語法文体を美しいものとして受け入れてしまうのである。でたらめに物を書くということに如何なる秘密もありはしない。技法とはその人なりの文体できちんと物を書けるようにするためのもの、作者の意見が輪郭鮮やかに描き出されるようにするためのもの、言葉が自由闊達かつ相和して流れてゆくようにするためのものなのである。

059 Письмо, что грамоткой простой народ зовет,
060 С отсутствующими обычну речь ведет,

061 Быть должно без затей и кратко сочиненно,
062 Как просто говорим, так просто изъясненно.
063 Но кто не научен исправно говорить,
064 Тому не без труда и грамотку сложить.

〈散文訳〉

世間の人々が簡単なメモと呼び、不在の人々と日常的な話し合いをするための書簡は小細工など労せず、簡潔に仕立てあげなければならない。つまり単純に話をするように単純に書かれなければならないのである。けれども正しい話し方を身につけていない人は、簡単なメモをしたためるのさえ苦労しないではいられないのである。

065 Слова, которые пред обществом бывают,
066 Хотя их пером, хотя языком предлагают,
067 Гораздо должны быть пышняе сложены,
068 И риторски б красы в них были включены,
069 Которые в простых словах хоть необычны,
070 Но к важности речей потребны и приличны
071 Для изъяснения рассудка и страстей,
072 Чтоб тем входить в сердца и привлекать людей.
073 Нам в оном счастлива природа путь являет,
074 И двери чтение к искусству отверзает.

〈散文訳〉

公衆の面前に提供される言葉は、それがペンで書き付けられるにしろ、口頭で語られるにしろ、必ずや艶やかに飾り立てられたものでなければならず、またそこにはレトリカルな美しさが含まれていなければならない。そうしたレトリカルな美は平常の表現ではめったに見られないものだとしても、言葉に威厳を持たせるために必要なものであり、理性や情念を描き出すためにふさわしいものなのであって、それがあればこそ人々の心の琴線に触れることができるの

であり、人々の関心を引きつけることができるのである。こうした創作活動においては恵み豊かな自然が進むべき道を示し教えてくれるのであり、読書が技法への扉を開け放ってくれるのである。

〈注 06〉

「こうした創作活動においては～開け放ってくれるのである」という最後の一文は、作家は作家としての天性に恵まれていなければならないことはもちろん、その他に豊富な読書を通して様々な技法を身につけることによってそもそもの天性に磨きをかけなければならないということであろう。

075 Посем скажу, какой похвален перевод:
076 Имеет в слоге всяк различие народ.
077 Что очень хорошо на языке французском,
078 То может в точности быть скаредно на русском.
079 Не мни, переводя, что склад в творце готов;
080 Творец дарует мысль, но не дарует слов.
081 В спряжение речей его ты не вдавайся
082 И свойственно себе словами украшайся.
083 На что степень в степень последовать ему?
084 Ступай лишь тем путем и область дай уму.
085 Ты сим, как твой творец письмом своим ни славен,
086 Дстигнешь до него и будешь сам с ним равен.

〈散文訳〉

こうしてどんな翻訳が賞賛されるべきなのかということが明らかとなろう。まずもってどんな民族にもそれぞれ他とは違った固有の言語と文体があることを押さえておかなければならない。フランス語では的確に表現できる事物も、ロシア語ではまったく貧弱な形でしか表現できない場合もありうるのである。翻訳に際しては、原作者に既成の文体が備わっているなどと決して考えてはならない。原作者は一定の思想を与えてくれるだけであって、言葉を与えてくれ

るわけではない。翻訳者である諸君は、原作者の語法文体に溺れてはならず、自らの母国語を駆使して文章を飾り立てるべきである。どうして一から十まで原作者に追従する必要があろうか？　ただ原作者と同じ道程を辿ることのみを心がけ、自分の知性を存分に働かせるようにすべきである。そうすることによって初めて翻訳者である諸君は、その原作者がどれほどの名文家であろうとも、原作者の域にまで到達し、原作者と肩を並べることができるようになるのである。

〈注 07〉

次節にまでかけて展開される翻訳の問題は、どこの国でも新しい標準語を創設しようとするときにはオリジナル作品の創作と同等の比重を持って論じられ問題であり、デュ・ベレーも『擁護』「第一の書」で2章（5～6章）を割いて論じている。ちなみに二葉亭四迷もまたロシア文学の翻訳を通して「言文一致」という新しい標準語の創立に取り組んだのであった。

087　Хотя перед тобой в три пуда лексикон,
088　Не мни, чтоб помощь дал тебе велику он,
089　Коль речи и слова поставишь без порядка,
090　И будет перевод твой некая загадка,
091　Которую никто не отгадает ввек;
092　То даром, что слова все точно ты нарек.
093　Когда переводить захочешь беспорочно,
094　Не то — творцов мне дух яви и силу точно.

〈散文訳〉

翻訳者よ、たとえ諸君の前に50キロにも及ぶ浩瀚な辞書がおかれていても、それが大いなる助けになるなどとゆめ考えてはならない。もしも諸君が文や語をでたらめに並べようものなら、諸君の翻訳は何やら判じ物めいたものとなり、未来永劫誰一人それを理解できないであろう。原作にある語のすべてを一つ一つ正確に訳したところで無駄なこと。瑕疵のない立派な翻訳を目指すな

ら、逐語訳などにこだわらず、原作者の真髄を、その迫真力をきちんと余すところなく伝えるようにすべきである。

095 Язык наш сладок, чист, и пышен, и богат,
096 Но скупо вносим мы в него хороший склад.
097 Так чтоб незнанием его нам не бесславить
098 Нам должно весь свой склад хоть несколько поправить.
099 Не нужно, чтобы всем над рифмами потеть,
100 А правильно писать потребно всем уметь.

〈散文訳〉

我がロシア語は甘美にして清楚、華麗にして豊饒ではあるが、我々はそこに立派な文体をまだごく僅かしか持ち込むことができないでいる。だから我々は無知によって母国語の名誉を汚すことがないように、たとえそれが微々たるものにせよ、母国語の文体を根本的に改善してゆかなくてはならない。猫も杓子もこぞって韻のために額に汗する必要などさらさらないのであって、万人に求められているのは正しく書くことのできる能力であるということは言うまでもない。

101 Но льзя ли требовать от нас исправна слога?
102 Затворена к нему в учении дорога.
103 Лишь только ты склады немного поучи,
104 Изволь писать «Бову», «Петра Златы ключи».
105 Подьячий говорит: «Писание тут нежно,
106 Ты будешь человек, учися лишь прилежно!»
107 И я то думаю, что будешь человек,
108 Однако грамоте не станешь знать вовек.

〈散文訳〉

とはいうものの我々にまっとうな文体など望みえようか？　まっとうな文体

を学ぶべき道は閉ざされているからである。諸君は正しい書き方の基本をほんの少しでも聞きかじるやいなや、『ボヴァー』なり『ピョートルの金の鍵』なりを書かせられる羽目になる。そして役人はこう宣うのだ ──「こうした書物は品性豊かなものであり、熱心に学びさえすれば、諸君はひとかどの人物となるであろう！」と。私が思うに、その場合、確かに諸君はひとかどの人物になることはできても、まっとうな読み書きの能力をきちんと修得することはついにできないであろう。

〈注 08〉

『ボヴァ―Бова』すなわち『ボヴァ―王子物語 Повесть о Бове Королевиче』、『ピョートルの金の鍵 Петра Златы ключи』すなわち『金の鍵のピョートル物語 Повесть о Петре Златых Ключей』はともに、17 世紀に個人的娯楽のために盛んに（主としてポーランド語から）翻訳された騎士道物語の一つで、あらゆる階級の人々に絶大な人気を博した。しかし 18 世紀に入り、ロシアが啓蒙君主国としての相貌を帯びるようになると、説教あるいは教訓的な要素が希薄で、ひたすら驚かせ楽しませるだけの冒険活劇譚である翻訳騎士道物語は、カンテミールやロモノーソフ、古典主義を標榜する文学者たちに「低級文学」の烙印を押され、その読書を禁止されるようになった。もっとも双方ともに（とくに前者は）、ロシア固有の民話と呼べるほどロシア化され、19 世紀を通じて命脈を保ってゆくのではあるが。

ここではまだまだ人気のあった騎士道物語が、第一に読み書きを勉強するための写本用原本として、第二に騎士道精神を修得するための教本として使われている実態を批判しているのであろう。

ちなみにフランス起源の『ボヴァ―』は全ヨーロッパに流布し、ロシアにはベロロシア語版経由で、口承の形では遅くとも 16 世紀後半に、入ってきたと思われる。愛人と計って国王である夫を裏切った母親に幽閉され、虐待される王子が、どうにか母親の魔手を逃れ、世界各地を放浪しながら様々な困難を乗り越え、ついには帰国を果たして父親の仇をうつといった内容の物語であるが、主人公はしっかりと構成された人物像として描かれてはおらず、多種多様

な波乱に富んだ冒険譚の結び目の役割を果たしているに過ぎない。

これまたフランス、ブルゴーニュ地方起源とされる『ピョートル』は、ポーランド語から1662年に初めて翻訳されている。自らの兜に取りつけた2個の黄金の鍵ゆえに「金の鍵の騎士」と綽名されるピョートルが、数々の武勲を立てて勇名を馳せ、しかる後に最初に愛を誓ったが、図らずも別れざるをえなかった恋人のもとに戻るという内容を持ったこの物語のテーマは、いわば女性への騎士道的愛と長い別れをものともしないその永続的な貞節である。カトリック的な要素が濃厚であるにもかかわらず、この物語は『ボヴァー』ともども娯楽作品として、ロシア的要素を深く吸い込みながら、レーニンによる革命に到るまで広く民衆に愛され続けた。余談ながら、筆者の周囲にいる3～4人のロシア人は全員『ボヴァー』は知っていても、『ピョートル』のことを知らなかった。宗教臭の濃淡がソ連時代を生き抜く力の差となって現れたのであろうか？

なお『ボヴァー王子』と『金の鍵のピョートル』について、および騎士道物語についての詳細は以下を参照のこと：① Энциклопедия литературных героев: Русская литература XVII — первой половины XIX века. М., 1997, с. 14—16 и с. 47—48; ② *Панченко А. М.* Литература «переходного времени». Рыцарский роман и оригинальная авантюрная повесть. // История русской литературы. В 4—х т. Т.1. Л., 1980, с. 348—357.

109 Хоть лучшим почерком, с подьяческа совета,
110 Четыре литеры сплетай ты в слово «лета»
111 И вычурно писать научишься «конец»,
112 Поверь, что никогда не будешь ты писец.

〈散文訳〉

たとえ諸君が見事な筆跡で、役人の忠告に唯々諾々と、4文字を組み合わせて「年年歳歳 лета」という語を綴ることができ、「完 конец」という語を凝りに凝って形で書くことができるようにはなっても、作家になれるなどとはゆめ

ゆめ思わないでほしい。

〈注 09〉

лета は韻の関係上第 1 音節にアクセントがあるので лето（夏）の単数生格と考えるのが普通だが、ここでは複数主格に解しておいた（まさかギリシャ神話に出てくる忘却の河レーテーのことではあるまい）。лета と конец がただ韻を揃えるために使われているのか、それとも『ボヴァ―王子』や『金の鍵のピョートル』といった娯楽本で多用される言葉として取り上げられているのかは不明。ただここの語調にそうした娯楽本の語法文体への批判が含まれているのは疑いようのないことだと思われる。

113 Перенимай у тех, хоть много их, хоть мало,
114 Которых тщание искусству ревновало
115 И показало им, коль мысль сия дика,
116 Что не имеем мы богатства языка.

〈散文訳〉

諸君には、その人数は多くとも少なくとも構わないが、完璧な技法を目指して努力を傾注し、その努力の結果、たとえそれが常軌を逸した考えに見えるにしても、我々はいまだ豊かな言語を有してはいないという結論に達した人々を模倣してみてほしい。

〈注 10〉

近代ロシア語、ロシア文学の完成がプゥシキンによってもたらされたとするならば、ロシア語が真に「豊かな言語」となるためには『二つの書簡詩』からほぼ 80 年という時の経過をまたなければならないのである。猟奇小説や冒険小説の翻訳では話し言葉としてのロシア語がふんだんに使用されていたとはいえ、トレヂアコフスキーの翻訳『愛の島への旅』をもって初めて意識的に開始された新しい標準語の確立には、古典主義はもちろん、ラヂーシチェフ、カラムジン、デルジャーヴィン、フォンヴィージン、クルィローフ、ジュコフスキー、グリボエードフを通過しなければならなかったのである。

117 Сердись, что мало книг у нас, и делай пени:
118 «Когда книг русских нет, за кем идти в степени?»
119 Однако больше ты сердися на себя
120 Иль на отца, что он не выучил тебя.
121 А если б юность ты не прожил своевольно,
122 Ты б мог в писании искусен быть довольно.

〈散文訳〉

そして我が国に書籍が少ないことに憤慨し、「ロシア語の書籍がないとすれば、いったい誰を手本にしたらいいのだ」と大いに慨嘆してほしい。だがそれ以上にまずは自分自身に対して憤慨すべきである。あるいは何よりもまず、きちんとした教育を施してくれなかったといって、父親にこそ憤慨すべきである。もしも諸君が青春時代を勝手気侭に浪費しなかったなら、諸君は技法に十分通じた名文家となることができたであろう。

123 Трудолюбивая пчела себе берет
124 Отвсюду то, что ей потребно в сладкий мед,
125 И, посещающа благоуханну розу,
126 Берет в свои соты частицы и с навозу.

〈散文訳〉

働き者の蜜蜂は甘い蜜の製造に必要なものをあらゆるところから拾い集めてくる。匂い芳しき薔薇を訪れもすれば、また堆肥からさえも何某かの物を巣へと持ち帰るのである。

127 Имеем сверх того духовных много книг;
128 Кто винен в том, что ты псалтыри не постиг,
129 И, бегучи по ней, как в быстром море судно,
130 С конца в конец раз сто промчался безрассудно.

〈散文訳〉

しかも我々にはただでさえ宗教関係の書籍が数多くあるというのに、諸君が「詩篇」を理解できないのは誰のせいであろうか？　諸君が、海の早瀬を行く小舟のように、「詩篇」を走り読みし、最初から最後まで百回近くも行き来しながら、内容についてはとんと見当もつかずにいるのは誰のせいだろうか？

〈注 11〉

以上 3 つの節はロシアにおける国語教育の貧困さ、国語そのものに対する注意不足を嘆いているのである。

131　Коль «аще», «точию» обычай истребил,
132　Кто нудит, чтоб ты их опять в язык вводил?
133　А что из старины поныне неотменно,
134　То может быть тобой повсюду положенно.

〈散文訳〉

「もしや аще」や「～のみ точию」という語がもはや廃れてしまったなら、そうした語をもう一度諸君が使うようにすることなどいったい誰にできようか？　一方また古い時代から今日まで生き残っているものなら、諸君はそれを何時でも何処でも自由に使いこなすことができるのである。

〈注 12〉

аще と точию は教会スラヴ語で、それぞれ現代語の если と только にあたる。

135　Не мни, что наш язык не тот, что в книгах чтем,
136　Которы мы с тобой нерусскими зовем.
137　Он тот же, а когда б он был иной, как мыслишь
138　Лишь только оттого, что ты его не смыслишь,
139　Так что ж осталось бы при русском языке?
140　От правды мысль твоя гораздо вдалеке.

141 Не знай наук, когда не любишь их, хоть вечно,
142 А мысли выражать знать надобно, конечно.
(1747)

〈散文訳〉

ロシア語とは我々がロシア語書籍とはみなしていない書籍の中で出会う言語とは違ったものであると考えてはならない。そうした書籍で出会う言語もまたロシア語なのであって、それが諸君の考えている言語と違うものだとしたら、それはひとえに諸君がその言語を理解できないからに過ぎない。もしもそうした書籍に書かれてある言語がロシア語でないとしたら、ロシア語の内実は空虚なものと化してしまうであろう。そうした諸君の考えは真実から遠くかけ離れている。学問が嫌いだというなら、たとえこの先ずっとにせよ、学問のことなんか分からなくとも構わない。しかしながら考えていることを言い表す方法だけは、是が非でも会得しなければならない。

〈注 13〉

「ロシア語の書籍とはみなしていない書籍の中で出会う言語」とは教会スラヴ語のことである。つまりここでは、新しい標準語に誰もが市井で話している口語を取り入れてゆくが、かといって教会スラヴ語も全面的に排除するわけではなく、よりよい語法文体のために双方をブレンドしてゆくという方針が表明されているわけである。それはまたジャンルの区別、および各ジャンルにおける使用言語の区別に厳格な古典主義の原理に見合ったものであり、ロモノーソフが『ロシア語における教会用書籍の効用に関する序文』(1758) で打ち出した、教会スラヴ語要素の濃淡によって高文体、中文体、低文体に分けるという、かの有名な「三文体論」と呼応するものでもあるだろう。

(本稿は 2000 年度研究助成費による研究成果の一部である)